

# 明日への扉

No.13



Kazuyoshi Shitami

志民 和儀さん

「書」の伝統と美を

未来に伝えていく



大学院進学後、書道はもちろん人間としても「悲喜こもごも」多くの経験をしたという。しかし「その経験が研究に行き詰った時に役に立っているのは不思議なこと」と志民さんは語る。

昭和47年愛知県生まれ。3歳の時に鹿屋市に転入。鹿屋高校卒業後、大阪教育大学、同大学院修了。平成15年、日本習字教育財団に就職し、「観峰館」の研究員を経て、平成24年から書学研究員。現在、大東文化大学客員研究員も兼ねる。大阪府高槻市在住。(43歳)

南小学校の2年生から習字を始め、多くのコンクールで受賞してきました。当然、高校の部活動では書道部を選択。そこでご指導いただいた恩師との出会いが、その後の人生に大きく影響しました。恩師の姿に憧れ、大阪教育大学に進学。大学の前半は書道の技術を高めるため、練習の日々でしたが、後半はアルバイト代で研究書を買ひあさり、読書ばかりしていたような記憶があります。

大学院修了後は高校の非常勤講師を掛け持ちして、なんとかその日を暮らしている有り様でしたが、そんな中、30歳で公益財団法人日本習字教育財団に就職し、財団が運営する博物館「観峰館」(滋賀県)の研究員として、中国の書画・骨董を中心に研究論文の執筆、学会での発表を行うようになりました。若い時にこのような経験ができたことは本当に幸いでしたが、それまでの無理と過労で体調を崩し、30歳代半ばを過ぎた頃、療養のために少しの間鹿屋に帰省しました。そこで久しぶりに故郷の自然と旧友に接し、いつでも帰って来れる場所の存在を再認識しました。この想いは今もまったく変わりません。約半年の療養を経て、平成24年に復帰しました。現在は財団で唯

一の書学研究員として、書の研究はもちろん、教材開発、執筆活動のほか、講演会の企画や講習会の講師を勤めるなど、全国各地を飛び回っています。また母校の大阪教育大学・大学院では非常勤講師として論文指導も行っています。

近年は電子機器の発達に伴い、キーボード等で文字を「打つ」ことが多くなりました。確かに「書く」ことより単純で楽な作業です。現代において文字は意思伝達の道具に過ぎないのかも知れません。

しかし文字を「手書き」することには別な側面があります。中国の大詩人であり書家の蘇軾が「人の字画は巧拙の外に蓋し趣あり」との言葉を残しています。これは「人間の筆跡は、上手・下手はともかくとして、それぞれに持ち味がある」という意味です。

電子メールや活字より「手書き」のものを嬉しく感じるのには、書き手の人間味に触れることができるからにほかなりません。私たちの祖先は、読み手に対する美しい「心ばえ」を筆跡で表現しようとしたのです。まさに「書」の魅力そのものです。このような習字や書道の伝統と魅力を多くの人に伝える活動を今後も続けていきたいと思っています。